

## 学位論文の要約

※ 整理番号		(ふりがな) 氏 名	(つつみ たかひろ) 堤 貴大
論文題目	デュラグルチド導入に伴う患者自己負担額の変化の検討 (Changes in Self-Paid Costs by the Initiation of Dulaglutide Treatment)		
<p>目的：2型糖尿病治療薬である週1回型GLP-1受容体作動薬（GLP1-RA）デュラグルチドは、注射頻度の少なさやデバイスの利便性から、導入に伴う患者の心理的抵抗が少ない利点を有するが、患者像によって自己負担額がどのように変化するか明らかではない。本研究では、デュラグルチド導入に伴う自己負担額の変化を検討した。</p> <p>方法：山梨大学医学部附属病院糖尿病・内分泌内科およびリウマチ・膠原病内科においてデュラグルチドを導入し、6ヶ月以上使用した2型糖尿病74例に対して後ろ向きに検討した。糖尿病治療薬剤費（注射製剤および経口剤）、在宅自己注射指導管理料、血糖自己測定器加算および注射針費の合計を「糖尿病治療薬剤関連費」とし、デュラグルチド導入時と導入後において検討した。群間比較にはt検定、<math>\chi^2</math>乗検定またはWilcoxonの符号不順位検定を用い、多変量解析は重回帰分析を用いた。</p> <p>結果：デュラグルチド導入後、糖尿病治療薬剤関連費が15,001円/月増加した。デュラグルチド導入時にインスリンを使用していた例（8,293円/月増加）、デュラグルチド以外のGLP-1RAを使用していた例（561円/月増加）、および注射製剤非使用例（23,132円/月増加）の比較において顕著な差が認められた。糖尿病治療薬の費用の増加量を従属変数とする多変量解析では、デュラグルチド導入による糖尿病治療薬剤関連費の増加が少ない患者像として、他のGLP-1RA使用例、インスリン使用例、HbA1cが高い例、罹患年数が短い例が抽出された。</p> <p>考察：注射薬非使用例と比較して使用例では増加額が小さく、GLP-1受容体作動薬からの切り替えに対し、注射薬非使用例においてはDPP4 阻害薬が中止となりながらも費用の増加が顕著であった。従って注射薬非使用例においては、十分かつ具体的に費用の変化を説明する必要があると考えられた。加えて、デュラグルチド導入の判断には、GLP1-RAによる血糖降下作用がより得られやすい患者像を踏まえた検討が必要と考えられた。</p> <p>結論：デュラグルチド導入に伴う患者自己負担額の変化を解析し、導入による糖尿病治療薬剤関連費の増加が少なくなる可能性のある患者像を示した。本研究が患者自身の治療選択ならびに治療継続性の検討の一助となることが期待される。</p>			

## 備 考

- ※印の欄には記入しないこと。
- 論文題目が英語の場合は、（ ）を付し、和訳を付記すること。
- 論文題目が日本語の場合は、（ ）を付し、英訳を付記すること。